

第4回 これからの学校づくり検討委員会 議事録概要

| | |
|----|---|
| 日時 | 令和4年5月19日(木) 18:30~20:30 |
| 場所 | 海陽小学校 1階多目的室 |
| 出席 | 別紙出席者名簿のとおり 市教委：教育長、教育部長、教育部次長、指導参事、椎名指導主事、棟方指導主事、山口学校教育課長、松尾学務係長、山本教職員係長、船橋教育総務課長補佐、土橋教育総務係長、林教育総務課主任、菊地教育総務課主事、松浦教育総務課主事 |
| 内容 | <p>配布資料：委員会次第 これからの学校づくり第4回検討委員会 時間進行の目安、班分け資料 本市小・中学校における不登校・いじめの状況について【事前配布】 第3回検討委員会話し合い 話し合い(ワークショップ)まとめ【事前配布】</p> <p>次第</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 第3回検討委員会の振り返り ○ 意見交換(ワークショップ) ○ 教育長挨拶 <p>○ 第3回検討委員会の振り返り</p> <p><市教委よりスクリーンへ資料を投影し説明></p> <p>○ 意見交換(ワークショップ) テーマ① <u>不登校について</u> 【A→B→C班の順で発表】</p> <p><市教委よりスクリーンへ資料を投影し説明></p> <p>【各班発表】</p> <p>A班</p> <p>○不登校の数について最初に皆さんで情報共有しましたが、昭和50年に全国の小中学校で1万人となっておりましたが、ファミリーコンピュータが普及し始めた昭和60年度から一気に3万人に増え、平成3年度で5万人を超えて、平成10年度で10万人を超えました。令和2年度で19万6千人となり、20万人に迫る勢いとなっています。</p> <p>不登校となる原因について、子ども・保護者・学校に分けて考えました。</p> <p>まず子どもですが、その子の特性によるものや、デジタルゲームの普及で生活が乱れ、無気力・不安にも繋がっていることや、昔と比べて子ども達の間関係の形成力が下がっていることや、昔のように家に帰って近所の異年齢の集団で遊んだり、体験をしたり、喧嘩をしても仲直りできたりという経験がなく、解決もしないでそのまま放ってしまうケースもあるのでは、という意見が挙げられました。やはり、上級生・下級生と一緒に遊び、地域の人と関わることで、地域のことや故郷が好きになることに繋がるのではないかと考えました。</p> <p>次に保護者ですが、不登校に関して困り感が薄い事例が増えているとの意見が挙がりました。保護者の忙しい面もあって、学校に行かせなくても困らず生活出来るなどの話も出ましたが、解決のためには親子で話し合うことが大切ではないかと考えました。</p> <p>最後に学校ですが、子どもが先生を信頼出来ているかや、先生が笑顔で子どもに声をかけるのが大事ではないかという意見が挙がりました。室蘭の場合、中学校で不登校が増えているので、小中が一体となって差をなくしていくことや、小学校5年生から中学校に少しずつ慣れるために、成績のつけ方や授業、部活も体験させるとか大事ではないかという意見が出ました。また、集団</p> |

活動での感動を経験することで、自分の居場所にも繋がるという意見も出ました。

ほか、勉強ばかりでなく楽しい行事を開催したり、美味しい給食を食べることもまた大事ではないかという意見も出ました。

B班

○学校・家庭・新たな居場所という視点でまとめてみました。

まず学校ですが、子ども達が逃げることにに対して周りが優し過ぎになり、嫌なことがあるとすぐに逃げてしまうような傾向があるという意見や、先生達が子ども達に様々なことを伝えていくために、もっと自信を持って良いのでは、という意見が挙げられました。普段の通学の様子を見てみると、子ども達の覇気がなく、学校に行くのが辛そうにしている子どもや、友達と一緒に通学している子どもが少ないことから、学校に行くのが楽しくないのではという意見も挙がりました。さらに、学校は勉強する時間がとても長いのに、子ども達の学力や問題解決力が低下しているのは大きな問題ではないかという意見も挙がり、子ども達の学力が向上し、授業が解って授業が楽しいと思えるようになれば、そこから学校や友達つきあいが楽しくなると思うので、そういったところは学校として出来ることがないだろうかというお話をいただきました。

次に家庭ですが、家の人と子どもとのルールや関係性が保たれていければ良いのですが、そうでない家庭も結構あり、親と子どもの人間関係や、子どもと向き合う時間のことなど、児童生徒本人だけじゃなく家庭全体に起因する問題であるため、そういったことを支援していくような組織が重要になってくるというお話をいただきました。

最後に新たな居場所として、そもそも不登校でも良いのではという意見が挙がりました。学校に行きたくても行けない子どもに対してはサポートし、学校に行きたくないと思っている子どもに対しては、他の選択肢や新たな居場所というものを、新たな視点で考える必要もあるのではという意見もいただきました。

C班

○不登校について、課題という部分で子ども達というところから考えてみました。

生活リズムの乱れや、友達とのトラブルを中々解決できずに不登校になってしまっている子ども達の解決力の低下について意見が挙がりました。学校に行くのに1人で歩いている子ども達が多く見られるようになったことや、じゃれ合う子ども達が少なくなったこと、そういう距離感に教師も親も子ども達も慣れてしまったのではないかという、子ども達の距離感の変化というのが話題に挙がりました。

その中から、昔は不登校というと完全な引きこもり、社会との関わりがなくなってしまう、そういう子ども達を不登校と言っていたのですが、今はネットで繋がっていたり、学校以外の場でも繋がっており、不登校の質も変わってきたのではないかというような意見も頂きました。今の子ども達は、全く学校に来れていない子もいるのですが、学校行事は突然学校に来て参加できるなど、学校が嫌なわけでない子もいたり、ゲームがあったり、家で1人でいても退屈しない環境があるのではないか。視点を変えると、学校というところでの肯定的なことを子ども達に伝えようし、その分理不尽さが少なかったり、極端な理不尽に中々経験出来ない、家庭が安定していない、そんな子ども達は肯定的な言葉・ものに馴染めない、むしろ違和感を感じてしまう子どももいるのではないか。そんな子ども達は、やる気も起きない、無気力になる。実はこの無気力・無関心は子ども達の不登校の一番の要因になっているとも言われております。

大人の視点で言うと、室蘭市の人口減、経済的な閉塞感、将来の展望が見えない、そんな空気を子ども達も感じてしまっているのではないかというお話をいただきました。

そんな子ども達をどのように救っていきけるのか、学校という視点で考えてみました。〇〇委員からは、学校・授業・評価というものにさらされている子ども達が、それ以上に人として大切なことを、しっかりと汲み取って評価して、還元してあげてない部分があるのではないか。義務教育9年間で学ぶことが、本当に人としての人生・価値に繋がっていくのではないか、道徳学習にもっとスポットを当てていき、人としての在り方を教えられる側を増やしていくような学校を

創っていくべきではないかという意見をいただきました。その中で不登校は、原因が多様化していて特效薬が無く、解決する手立てが無いため非常に困難ですが、どの先生でもどんな子どもでも繋げられるチャンネル「インターフェイスの多様化」というのがキーワードではないかというところで、後半お話をさせていただきました。

例えば児童館では、クラスがなく先生方が沢山おり、その中で誰かと繋がることができる。小学校でも教科担任制が入ってきて、見守る目が増え、そして子ども達の居場所というものを増やしていけるのではないか。学校という場が集団生活を学ぶ場になっていくべきではないかという意見をいただきました。そのような話の中でも最後には、子ども達の特性や不適應をおこすだけでなく、光・音・人に敏感な子ども達が増えてきている現状があるので、学校という場が、不登校に限らず子ども達の居場所になればいい、学校の良さを伝えていきたいという話になりました。

テーマ② いじめについて C→B→A 班の順で発表】

<市教委よりスクリーンへ資料を投影し説明>

【各班発表】

C 班

〇いじめについては、暴力によるいじめは減りましたが、ネットによるいじめ、言葉によるいじめ、陰湿化など、形態の変化を感じられました。また、学校の統廃合による、学校間の温度差、文化の差もあり、その違いがいじめに繋がった部分もあったのではないかという意見をいただきました。

中でも、本質という部分でいうと、いじめはなくなるのではないか。いじめは人間の本質、本能の1つではないか。だからこそ正しい知識を子ども達に提供していくことが大事ではないか。対処の方法、スキルを身につけることが大事ではないかというお話もありました。

実際、大人でも職場や学校でいじめはあり、「いじめ」と「いじり」の違いがわからない大人も実際にいるのではないか。そんな大人の姿を見た子ども達が、いじめに走ってしまう部分はないのかという話がありました。人として大切にすべきこと、これを大人がしっかりと伝えていくべきではないかというお話でした。本質という部分では、他の人を許容・尊重し、寛大さが大切ではないか。否定することは簡単だが、視点を変えることによっていじめを減らすことは出来るのではないか。学校でも職場でも実際、能力差はあるが、その中でもその人たちを尊重できるような職場、学校をつくっていくことが大事ではないか。学校というところで話をすると、心理的安全性のある学校をつくっていくべき。そのためには道徳心の育成、基本的な生活習慣、集団の中で人と人の繋がりをつくっていけるような、そのような学校をつくっていくことが大事ではないかという意見が挙がりました。いじめを見逃さない体制づくりや、小さい内に芽を摘むような、いじめを許さない問題が発生したら、その場で解決でき、虐めた子や虐められる子へのフォロー、そのようなことを考えていくことで救われる子ども達が増えるのではないか。そのためには、今まで以上に小・中・高の連携が必要なのではないだろうかと考えました。

B 班

〇C 班のお話でもありましたが、皆さんの共通の意見として、やっぱりいじめはなくなるという意見になりました。いじめの定義は、相手が言われた方、やられた方が不快な思いをした時点でいじめであり、集団でも、一対一でもそういう風になってしまったとしたら、それはもう無くなるものではなく、それを前提として、どのようにしていくかという話し合いになりました。

まず、この原因となってくるところに、先ほども「いじり」というようなお話しが出ておりましたが、子どもは全ての大人の鏡であり、やはり真似するものであり、テレビで見ているような「いじり」、あるいは先生が気付かないで親しみを込めてるつもりで言っている・やっていることがきっかけになってしまっていることもあるのではないかと意見が出ました。

さらにテレビの中で、暴力や争いなど、そういったものが湯水のように子ども達に影響を与えている部分があるほか、携帯電話・SNS とのつきあい方について、一昔前では考えられなかったメディアとの繋がり、メディアに対する付き合い方というのを、大人がきちんと教えてあげられているのか、そここのところは凄く重要だというお話をいただきました。

あと、「いじり」とは少し違うのですが、女の子同士の間付き合いは凄く複雑で、その日その日でどんどん気持ちが変わりやすく、仲間はずれや、今日はあの子が仲間外れだったら、今日はあの子が仲間外れみたい、仲間外れの連鎖が起こるなど、そういう中で自分はどちらの方についていたいんだろうかというように、悩んでしまう難しさというのが、女の子の世界としてあるのではないかなという意見もいただきました。

子ども達がトライアンドエラーをし、何かをやって問題が起きた時に、それを経験として自分達・上級生と一緒に解決していくことや、子ども達でしっかり解決する力を身につけさせてあげることが凄く大事なのではないかということ、声かけの仕方も社会に出るための大事な経験のひとつではないかというような意見もいただきました。ただ、それを子ども達だけに全て任せてしまったら、自殺などに繋がってしまうこともあるので、そうなる前に大人がフォローできるようにするべき、子ども達の人格を「1人の人格」として扱う社会、大人がアンテナを高く持って、さらに子ども達一人ひとりが、さらに高いアンテナを持つことが出来るような子ども達を育てていくというような大人の力、大人の姿、大人の役割ってというのが、非常に重要になってくるというような意見をいただきました。

A班

OA班は5点意見が挙がりました。

1つ目は、教育委員会の最優先課題として自殺の予防です。どんなことがあっても絶対守り抜くということが挙げられました。

2点目は、やはり大人の姿から子どもは全部を学んでいるので、強い・弱い、良い・悪いを、大人が手本となるということが挙げられました。

3つ目は、みんな一緒に強調されると、違った言動・考え・意見があると排除されるので、授業で違う意見・考えを大切にすることが、いじめの防止の第一歩ではないかという意見が挙がりました。今は、子ども達が「LINE」の返信を気にして、返信しないといじめられるとか、SNS であるという間に広がるだとか、SOS の出し方が、本市の中学生9割が「いじめアンケート」であるため、そのSOS の出し方も大事なのではないかということです。

4点目は、子ども達同士の繋がりが少ない、自信が無い、寂しいということなどで、「学級内で僕は学級の皆から必要とされている」や、「私は皆の役に立っている」など、自己有用感や縦割りの活動で心の安定を持たせることが大事ではないかということが挙がりました。

5点目は、先ほどもありましたが、喧嘩が出来るようにならないと、という意見が挙がりました。昔みたいに喧嘩をして、仲直りをして、前よりもっと仲良くなっているということが少なくなっているということが出ました。

<検討委員会終了>